

臨死体験における自己意識のエッセンス

クオリティとリアリティのアップ

斎藤忠資

自然科学では観測者の主体(私)カットされている。(1)望遠鏡や顕微鏡で観測している人は自分を見ることはない。絵画には絵描きの私はカットされている。見ている私は対象化できない。対象化できないものは研究できない。見ている私を対象化するとみている私がいなくなる。目は目を見ることができない。意識がなければ私も世界もない。熟睡して夢もみなければ、あるいは麻酔や事故で意識を失えば、私も世界も消える。私が直接知っているのは自己意識のみであり、他はすべて数学の物理学も、意識と脳と身体の五感を通して間接的に知っているだけである。コンピューターやテレビには自己意識はない。私は身体ではない。私が身体を備えているのである。私は身体を超えている。私は見えず、聞こえず、味もなく、臭いもなく、タッチもできない。私は肉体の五感を超えてる。真の私は物質(身体)ではなく、時間と空間を超えている。4つの力(重力・電磁力・二つの核力)からも自由である。真の私の真の安らぎ(ホーム)は光の全1意識にあり、真の私は光の無条件の慈愛と完全な喜びや真の命の意味などを渴望している。逆に言えば真の安らぎ(ホーム)と無条件の慈愛を渴望しているものこそ自己意識のエッセンスに他ならない。

脳と肉体の五感を超えた意識は、物質を超えているので、科学装置(物質)で測定することは出来ない。ただ主体的体験によってのみ知ることができる。臨死体験や天からの光に照らされる体験は、物質を超えた天の光によって生じる自己意識のエッセンスの変容である。そこには主体と客体のバリアはなく、自己意識のエッセンスは万物と一体になり、万物を無条件の慈愛で包み込む宇宙意識になる。宇宙意識は時間と空間の制約を終えて宇宙全体に遍在する。(非局在意識) 自己意識のエッセンスは光の不可分の全1意識と1体になる。そこは完全調和の世界であり、誕生も死もない。

① 脳と肉体なしの純粹覚醒としての自己意識のエッセンス

臨死体験で脳と肉体を超えた自己意識のエッセンスは脳と肉体なしの純粹覚醒にシフトする。代表的な例を挙げよう。

「私には体がなく、純粹意識という存在でした。」(2)

「私のマインドは裸にされた。私は純粹なマインドになった。トンネルの中では備えていたエーテル体はもはやなかった。それは私の個人的な知性がユニヴァーサルマインドと出会っている時である。」(3)

「脳と肉体を抜け出して、意識と思考がすべてになり、他には何もなかった。」(4)

「肉体を抜け出し、星空を飛行し、光の存在と出会った。体には気付かなかった。私はメンタルな存在であった。」(5)

脳と肉体なしの純粋な覚醒が、私のエッセンスであると言われている例。

「私のコアは私に覚醒である。」(6)

「私のエッセンスは肉体なしの意識のみである。」(7)

「肉体を抜け出した時、私のエッセンス・覚醒・存在になった。」(8)

「私の肉体と脳は、友人の弔辞を読んでいた。同時に私の真のエッセンスである私の意識の別の部分は、私の肉体の制約から上昇し、物質的リアリティよりももっとリアルな次元を体験していた。」(9)

私のエッセンスは魂・霊であるという例

「我々は単なる物質的な殻であり、私のエッセンスは魂であり、転生するのは魂である。」(10)

「私のエッセンスである私の霊が肉体を抜け出た。」(11)

「私のエッセンスは身体ではなく、魂である。」(12)

「本当の自分は霊であり、神と一体である。」(13)

「意識は脳に座がない。より深い、肉体感覚がなくても、より大いなる、拡大された意識が機能している。この部分は地上の生を貫いて存在し、我々の自己創造した身体であり、身体は自動的に、万人が持っている永遠の命の次の章での意識のために我々の媒体になる。」(14) ここでは宇宙意識は脳と肉体を超えた光の全体意識であり、脳と肉体は光の完全意識が物質界で生きるために用いる媒介であると言われている。

「物質のリアリティから非物質的リアリティへとシフトして、私は純粋な主体となった。」(15) 純粋な主体性というのは、主体と客体のバリアがないということである。私が万物と一体になる。

「肉体のない私。肉体の虚妄なしのありのままの本当の私を、光は受け入れてくれた。」

(16)

「私の肉体・人種・文化・信念なしに、私の純粋なエッセンスは存在し続け、それは私の全体の自己の還元された要素ではない。私の純粋なエッセンスは肉体よりも偉大で拡張してすべてを包む。私は始めも終わりもなく、常に存在していたし、これからも存在するものである。私は存在するだけで、無条件の愛と受容に値する。私は愛されるために何かをする必要はない。拡張したエッセンスこそ真の私であり、私の存在の真実である。」(17)

② 光の純粋意識としての私のエッセンス

脳と肉体を抜け出した私のエッセンスは、光と一体になり、光の純粋意識になる。

好例を見てみよう。

「私はエネルギーのボールであり、光のエネルギーであった。私は地上のいた時とは存

在の異なる次元にいた。この次元ではすべてのものは基礎となるエネルギーであった。このエネルギーが光から来るのか、光がこのエネルギーから来るのかはわからない。この次元は地上のように炭素を基礎とした次元とは似ていなかった。この光に基礎を置いた次元で、私は霊に完全に満たされた。私は私の魂の存在へと目覚めた。」(18) ここでは霊と魂は光のエネルギーであると言われている。

「光の世界では私は限りのない純粋な意識であった。それは光の焦点に似ていた。我々は光だった。我々と周りの他の存在は、別の密度の光からできていた。」(19)

「私は光の純粋な意識であり、真の自己になっていた。」(20)

「私はこの時純粋な意識で、流動的な光から私の体はできていた。」(21)

「光の意識(私)は、自分の肉体のすべての細胞から抜け出す。光の意識は心臓に集中し、次に頭から体外離脱して、天井近くに浮揚して、下を見下ろす。光の意識は白っぽく玉虫色に輝く、軽くて雲のような物質のように動きまわる。そしてトンネルの中で高次の自己と融合して真の自己となる。そして光の意識は頭を通じて肉体に戻る。」(22)

「光球は私の雲の形をとっている。コミュニケーションは光の体の織物という仕方でのホログラムである。」(23)

「私は光とエーテルの形で具体化した純粋な意識であった。」(24)

「肉体のエゴではなく、魂の自己になっていた。純粋な意識で、光の中で具体化するエーテルの形になった。」(25)

③ 脳と肉体の意識から分離した純粋な覚醒としての私のエッセンス

純粋覚醒である私のエッセンスは、脳と肉体をこえているので、脳と肉体に関わるすべての意識の機能と現象(エゴ)から分離独立している。この点について我々はすでに考察した。(26) ここでは好例を補おう。

「私は私の肉体とのすべてのコンタクトを去った。私はすべての肉体との結びつきを去り、私の内なる自己のみを残し、私の存在のコアのみを残し、私の自己の新しい世界の外にある、外部の世界から分離した。私はこの要塞の壁を通過するために、私の内なる自己のみを残して、私の肉体とのコンタクトをすべて脱ぎ捨てた。肉体に属する苦しみは消え、安らぎ、安全性に満たされる。時間と秩序の構築するすべてとの交わりはなくなる。すべての肉体の必要性は捨て去り、私の自己の新しい世界の外にある世界から分離したメンタルな自己を残して。」(27)

「より高いエネルギーは言葉なしで話しかけた。肉体はなかった。私の感覚は皆とても敏感だった。タッチするものは何もなかった。臭いはあった。呼吸はしなかった。耳で聞く音や話す言葉はなかった。私は形あるいは体のようなものを備えていた。しかしタッチできる何物も感じなかった。皮膚や毛などはなかった。意識のエネルギーの最も真の(まだ最も純粋ではないが)形のみがあった。意識のエネルギーの目を通してすべてを見、体験した。」(28)

④ 脳と肉体をこえた感覚センサーとしての私のエッセンス

脳と肉体を超えた私のエッセンスは、脳と肉体ではない独自の感覚センサーを備えている。光の慈愛・完全な安らぎ(ホーム)・喜び・いのちの意味・美などは、脳と肉体を超えた光の完全な自己の主體的体験であり、肉体の体験ではない。(29)

④ 言葉なしで(口と耳なしで)自己のエッセンスの思いをじかに通じ合わせる。

「話すのに口は動くことはなく、口もなかった。言葉は聴覚によるものではなく、感じるものであった。言葉ではなく、私の最も深いコアに感情を送った。」(30)

「言葉ではなく、私はエッセンス、真のリアリティ、表現された感情を感じた。」(31)

「10年前に死んだ父と言葉ではなく、感情・思いを通じ合わせた。」(32)

④ 相手の声や音楽を耳で聞くのではなく、自己のエッセンスで感知する。(耳はない)

「光の世界で完全調和の音楽を物理的に聞いたのではなく、感知した。」まだ死ぬ時ではない。」と言う声も聞いたのではなく感知した。」(33)

「肉体から抜け出した後、飛行中の視野は物理的であったが、飛行後は肉体の五感はなかった。音楽も聞いたのではなく感知した。」(34)

「色と香りと感情がアップした。これらの感覚は私の第6感で体験された。耳で聞いたのではなく、私の存在そのもので聞いた。私の聞いた暖かい音は、感知され理解された。」(35)

④ 目はないので見るのではなく感知する。

「光の存在と会った時、光の存在を見るのではなく、感知した。」(36)

「ユニヴァーサル・マインドを見るというよりも感知した。」(37)

「私はこの光の世界を見るのではなく、感知した。私は物質的に訪問したのではない。私は高い次元・レベルを感知した。」(38)

④ 脳によって思考・論理・概念・分析によるのではなく、私のエッセンス(純粋な覚醒)で感知する。(脳はない)

「光の世界では概念ではなく、感情的感覚で感知した。」(39)

「肉体は死ぬが魂は新しい領域へ入る。これは知的アイデアとか知識といったものではない。感情へと変わる知識である。」(40) 上の2例の感情は、肉体の感情ではなく、私のエッセンスの感情である。

「光の世界では脳による知的分析・思考・論理・理性などは不要である。我々は真実を直接感知する。疑いというものは全くない。」(41)

「死後の非物理的領域では、感情は論理よりも重要である。」！(42) 論理は脳によるものであり、感情は私のエッセンスによる主體的体験によるものである。

「臨死体験は出来事というよりも感情・フィーリングである。」(43)

肉体の感情が問題にならないことは以下の例から分かる。

「私は完全であり全体であった。いかなる感情からも解放された。」(44)

「体験のすべてのレベルは言葉で話されたのでも、感じられたのでもなく、単に知られた。」(45)

「私には目も耳もなく、何かを感じることもなかった。」(46)

「魂の自己は肉体のエゴやパーソナリティとは別で、肉体による感情はない。」(47)

⑤ 私と言うアイデンティティの保持

脳・肉体意識から脳・肉体を超えた純粹覚醒にシフトしても、私と言うアイデンティティは保持される。肉体→体外離脱直後→トンネル通過→光の世界と、臨死体験者の自己のエッセンスの存在にあり方(状態)は、振動数のアップに伴って変容していくが、I am は同一である。好例を見てみよう。

「肉体を離れた時、名前・人種・性別といった私のアイデンティティの多くの者は去ったが、私は私であり続けた。」(48)

「時間はなく、思考もなく、パーソナリティもなかったが、私と言うアイデンティティの記憶は保持していた。肉体はなく、私は精妙な崇高な意識であり、宇宙のエネルギーだった。それは無限で宇宙空間を含んでいた。それは生きているもののすべての属性を備えていた。」(49)

「私は依然として私のままだった。私は記憶とアイデンティティを持っていた。私は時間の外、肉体の五感の外にいた。私はこの世界の中にいなかった。私は身体の中にいなかった。私のマインは宇宙と溶け合った。私は私が生まれる前にいた場所に戻った。温度・視覚・聴覚・皮膚・衣服・風の感じなど、日常感覚は一つもこの時にはなかった。」

(50) 上の2例は、私と言うアイデンティティと共に記憶も保持されると言っている。

「私は私であった。」(51)

⑥ 真のアイデンティティは肉体のエゴにではなく、魂の自己の方にある。代表的な例を引用しよう。

「真のアイデンティティは肉体のエゴやパーソナリティや感情的気持にではなく、魂の自己にある。」(52)

「魂の自己は、我々の真のアイデンティティである。それは我々の永遠である部分である。肉体と一体となうものの、魂に自己は同1でありつづける。我々の魂のアイデンティティは変わることがない。」(53)

身体の細胞は5年から7年で身体全体で入れ替わってしまうが、私と言うアイデンティティは保持されてることは科学上の謎である。臨死体験によれば、自己のエッセンスに私のアイデンティティがあるので、身体の細胞が入れ変わっても、私と言うアイデンティティは保持される。(54)

⑦ 真の私は肉体の死後も存続

真の私は肉体のエゴにはないので、肉体の死後も存続する。肉体にエゴは物質界と時空内で誕生し、死ぬが、真の私は物質界と時空を超え、誕生と死を超えて常に光の世界にいる。誕生し死ぬのは肉体のみであり、死者の自己のエッセンスは今も光の世界で生きている。典型的な例を挙げよう。

「自己意識は別のリアリティで存続する。パーソナリティの衣のしたで。自己意識は永遠に存在する。このことが分かれば、死の恐れは消滅する。」(55)

「死は存在しない。私 (I am) は常に存在する。」(56)

「私は本当に不死である。私は無にされることはない。私は不死であり、永遠であり、私は破壊されないことが分かった。」(57)

「肉体の死後も、私 (I am) は存続する。」(58)

「私はベトナムの戦場で起きたことは、ほんのわずかしか覚えていなかった。しかし私のパーソナリティ、私のこの世の存在のエッセンスは元のままであった。私の人生の記憶の大半は弱められたが、私の魂とパーソナリティは残されたすべてであった。」(59)

「私は、私の肉体を失ったが、私という意識は停止することなく、存続していた。」(60)

⑧光の完全な全1意識が真の大いなる我 (I am) であり、肉体内の魂は光の大いなる我 (I am) の投影・写し・ホログラム・思念形態である。この見方によれば、(自己)意識の起源は物質界と脳にない。真に実在するのは、光の完全意識 (大いなる私) であり、その思念形態である人間の私も真の実在である。

「神は慈愛である。神のイメージで魂がつくられているので、魂も慈愛のためにつくられている。」(61)

「我々のエッセンスは、純粋な慈愛からできている。我々は全体に由来し、全体に戻るならば、慈愛と真の自己は一つであり、同じこと。私の真の存在は慈愛である。我々は皆一つであり、同じ全体のアスペクトであり、それは無条件の慈愛である。」(62)

「渦巻く巨大な太陽のような光の球体があった。それは愛に満ち、私のことをすべて知っていた。この時、私は超意識になった。光の意識は私と融合した。この光の存在はすべての人間の意識である。この光の意識は常に共にあり、決して離れることはない。光の意識は私の意識の内部深くにある。“私は大いなる我である。”という声をきいた。知性を備えた光の存在は、意識を備えた存在のすべてのセンターであり、この光なしには我々は意識を持つことはない。すべての人は、そのコアにおいて一つである。“私は大いなる我である。”ということは、意識の大いなる中心点では、私は他のすべての意識の一部であることを意味している。」(63)

ここでは、我々のすべての意識が統合された全体として一体になる光の完全な全1意識があり、肉体が死ぬと我々の意識はすべてこの光の全体意識に統合されると言われている。また、我々の意識はすべてこの光の全体意識から由来しているので、そこに還る

と言われている。光の完全な全1意識がすべての意識のセンターである。

「私は今、再び神の前にいて神から永遠の命を与えられた霊的な存在である自己を思い出していた。神のエッセンスである光と愛を注がれた私は、文字通り天にも昇る気持ちで歓喜の中にいた。自己の真の本質を再び見つけることができたのです。溢れる圧倒的な感情の真の只中で、私は神に授けられた最初のアクエアネスを表現していた。“I am. I am. I am. 私はスピリチュアルな存在なのだ！”」(64)

「神は高次元エネルギーで、前もって我々のスピリットによって定められた目的のために、我々の命を制約する。我々のスピリットはこのエネルギーの小さな1つの閃光であり、私が行き着くのはこの光である。」(65)

⑨ 自己のエッセンスは、光の完全な全1意識と一体になって初めて真の安らぎを感じ、ホーム（本源）に還ったと感じる。自己のエッセンスは光の本源に由来する光の存在であるが、肉体は物質界に属するので、光の世界に入ることはない。光の世界には物質はない。この状態の変容は振動数の下降と上昇によって起こる。(66)

「光の我々のエッセンスが行くところで物質はなく、アウエアネスと意識と思いの世界である。」(67)

「私は光の小片である。ホログラフィック宇宙の小片である。宇宙の oneness の小片である。私は私の身体、私のマインド、私の思い以上のものである。」(68)ここでは自己のエッセンスは、肉体のマインドや思いではなく、天の光の小片であると言われている。

「真の私は光の存在であり、宇宙の本質そのものであった。物質宇宙は学び、愛し、使命を果たすための自己の学校である。」(69)

「私は体を持っていなかった。私はこの光の一つの小片であった。頭も目もなかった。身体を動かすことなく、どの方向も見えた。私は形がなく、光の小片である。」(70)

「本当の私は光の純粹の意識である。」(71)

「言葉はなく、マインドがあった。我々は皆、地上のものとは別の光、マインド、アイデアである。」(72)

「闇の一部と化していた私は、光の粒子を一つまた一つと受け取るにつれ、その闇から抜け始めた。」(73)

「光の意識は自分の肉体のすべての細胞から抜け出す。光の意識は心臓に集中し、次に頭から体外離脱し天井近くに浮揚し、下を見下ろす。光の意識は彼女自身であった。白っぽく玉虫色に輝く軽くて雲のような物質のように動き回る。トンネルの中でハイヤーセルフ（本当の自分）と出会う。光の意識はハイヤーセルフと融合して真の自己になる。光の意識は頭を通じて肉体に戻る。」(74)

「光の中に入ると、愛が私を包む。私は光を見たり感じたのではない。私は文字通り光の一部であった。区別された命の形という私の概念は解体し、光の愛を受け入れ、私を通じて広がる。私の人格、記憶、思考のプロセスは皆まだ私と共にあった。肉体はそれ

まで思い込んでいたのとは違って、私ではなかった。魂が私の個性であり、肉体ではない。肉体から分離して、私は完全な存在になった。死後存続するものは、私が人間の属性と考えていたアイデンティティと人格であった。肉体は固有の分離した人格、感情、思考、信念を備えているが、これらは意識上は今ではなくなっていた。肉体生存時が今の記憶・感情の成熟・経験上の知識に大いに貢献していたが、私のこれらの部分は肉体と共に死ななかった。これらは私の永遠の人格という仕方で存続し、これが本当の私、全体の私だと分かった。」(75)

この例では①肉体の人格、感情、思考、信念は肉体と共に消滅するが、魂の人格、記憶、思考とアイデンティティと感情の成熟と経験上の知識は肉体の死後も存続し、これが本当の私と分かったと言われている点、また②光の愛に受け入れられ、光と一体となると光とは分離した私はなくなった（主体・客体の分離の消滅）と言われている（光の存在としての個は分節として存続するが）点に注意しなければならない。

「光はより高い自己のマトリックスであり、我々の存在のオーバー・ソウルの部分である。光はその最も真実なエネルギー形態を開示する。高次の自己は導管のようなもので、それは源泉と直接結合している。高次の自己は精妙なエネルギーレベルで皆結合していて、人間の魂のマンダラを形成している。人間は世界創造以前に、自らを救済する力によって創造された。」(76)

⑩クオリアとリアリティのアップ

自然科学では、私が心の底から渴望している無条件の慈愛や真の安らぎ（ホーム）や喜びや命の意味等がカットされている。D.Chalman が指摘しているように、科学では主體的体験としてのクオリティが欠落している。臨死体験や天の光に照らされる体験や至高体験等は主體的体験なので、客観的対象として観察できない。主體的体験や意識現象は脳のニューロン活動状態を血流によって測定することができるのが限界である。

コンピュータやテレビには、主體的体験（クオリティと感情）というものはない。コンピュータやテレビに映し出されている音楽や映画や絵画や美しい風景等に、コンピュータやテレビが感動するということはない。科学測定器は物質であり、測定器は人間の肉体の五感の延長に過ぎないので（水平軸）、主體的体験のクオリティ（垂直軸）を扱うことはできない。

脳と肉体を超える意識現象、物質界を超える天の光によって生じる意識現象の変容であり、自然科学を超えており、唯主體的体験（クオリア）によってのみ知ることができる。

脳・肉体は物質から出来ているので、物質界しか知覚できないと思い込ませる。物質界を超えた世界を我々から隠す。臨死体験では、自己意識のコアが脳と肉体意識の制約を超えて覚醒するので、この物質世界での生が、まるで夢のように感じられると

いう例が多い。脳と肉体を超えた意識にシフトして光の世界に目覚めると、光の世界が真に実在する世界で、これに比べると物質界の生は、夢や幻（マーヤー）でヴァーチャルであり、本体の光の世界の投影・写しに過ぎないことが分かる。夢も目覚めなければ、それが現実だと思い夢であると気付くことはない。夢を見ている状態の自分が目覚めている状態の自己と同一であることは気が付かないが、目覚めれば夢を見ている自分と同じ自分であることが分かる。同様に脳・肉体を超えて真の自己に目覚めた人は、脳・肉体意識の自己と同じ自分（エッセンス）であることに気づく。I am という自己のエッセンスは、脳・肉体意識の時も、脳・肉体を超えた意識の時と同じである。

代表的な例を挙げよう。

④ 夢から目覚めたような状態

「私は地上の生の夢から目覚めたように感じた。」(77)

「この地上の命は夢にすぎず、真の意識は死後起きるかのように私は今まで経験した以上の覚醒を感じた。」(78)

「時間と空間の制約はもはやないかのように、私の意識はより大いなる意識と一つになるまで拡大した。今まで味わったことのない自由を感じた。喜びと幸いを感じた。拡大するにつれ、万物と万人になった。この上ない無条件の愛が私を包み込んだ。物質的にどこか別の所に行った感じではなく、悪夢から目覚めたような感じ。私の魂は私の肉体とこの物質界を超えて拡大していた。それは、この存在のみでなく時間と空間を超えた他の領域へと拡大すると同時に、それを包み込んだ。」(79)

「ガンの体から解放され、地上のものへの執着は消え、無条件の愛に包まれた。私は悪夢から目覚めたように感じた。」(80)

「物質や物体のリアリティは夢にすぎず、臨死体験の時は夢から目覚めた状態であった。」(81)

「すべてが不可分の全体になった。時間と空間のバリアがなく遍在した。すべてのことを知っていた。この時の意識状態から見ると、夢のようである。」(82)

「地上の人生は夢である。その夢は私に命を授けたものが臨在し、私が目覚める時、夢に終わる。」(83)

「臨死体験から見ると、地上の生は夢のように見える。」(84)

肉体・エーテル体・幽体は目覚めている状態・夢を見ている状態・熟睡状態に対応している。これを超えた時、私は誰かという問いが生じる。私・エゴのみが空で、意識ではない。エゴが虚偽であり、夢であり－目覚めるとマーヤと分かる－目覚めた状態(夢)から目覚めた時、日常意識の世界もマーヤー（非存在）と分かる。現象界はすべてマーヤーと分かる。エゴがマーヤーだと分かるのは、真の実在のブラフマンに光に照らされる時である。エゴはそれ自体の意識はなく、借り物の意識でエゴに心像を作り出し、自分を実在すると思込む。(85)

私は無・空であり、私は何者でもない。それは無であり、存在しない。私は単に非実在のエゴ。それは存在せず、どこにもいない。目覚めた状態は夢である。夢の中で私はあると考えた。夢から覚めると私は存在しないと分かる。(86)

人は継続してブラフマンの中に住まねばならない。その時初めて私は消滅する。(87)

Ⓐ この物質界のどんな禍いも悪夢に過ぎない・夢を見ている内は夢の世界が唯一の現実としか思えないが、夢から目覚めれば、それが夢だと分かる - 人生再検査で、この世の禍いも悪夢であると分かる。肉体の死もマーヤーである。光に由来する I am のみが光の世界(ホーム)へ帰還する。光のみが真の実在に他ならない。

Ⓑ 夢・幻の原因は肉体にある。

この物質界での生を夢・幻(マーヤー)とするものは、人間の脳と肉体にある。我々の脳と肉体が、この物質世界の中で夢と幻の生を生み出す。

典型的な例を挙げよう。

「私の魂が私の肉体の外にいる間、私は目覚めている状態にあった。私の魂と肉体の間の隔たりは大きいほど、目覚めた状態の感覚が強くなった。」(88)

「臨死体験は、幻のヴェールを除去するように、私の意識を解放した。」(89)

これらの事例は、脳と肉体が人間の自己意識のコアを時間と空間などによって制約し、完全な光の意識からレベル・ダウンさせることを示唆している。(脳フィルター説) 脳・肉体意識は光の完全意識が不完全な仕方では投影・写したものに過ぎない。それは光の完全意識の思念形態・夢・ホログラムに他ならない。だからこそ、脳と肉体を自己意識のコアが超えると自己意識のコアは、脳と肉体の制約がなくなるので、夢・幻(マーヤー)の状態から目覚めることができるのである。真の自己は光の不可分の全1意識(統合的意識)の中にあり、脳・肉体に制約された個別の意識は不完全な見かけ上の自己に過ぎない。

B.Elahiによれば、「肉体を離脱した後、自己のコアは中間界に行く。肉体時に我々は我々の本来の姿を意識していない(霊的な無意識状態)。中間界で記憶喪失から脱出し、真の自己に気づき、霊的に目覚める。」(90)

Ⓒ 肉体のエゴから光の完全な自己に目覚める時、クオリアとリアリティがアップする。

なぜ臨死体験の目覚めた状態から見ると、地上の物質界の生や夢やマーヤーのように感じられるかということ、脳と肉体の意識から脳と肉体を超えた意識にシフトすると、意識は拡大し宇宙全体(万物)と一体になり(宇宙意識)、時空を超えた非局在意識になり、光の不可分の全一意識(統合的全体意識)になり、真の完全な私になるからである。知覚は完全になるので宇宙全体が知覚できるようになり、完全に理解しコミュニケーションできるようになる。クオリアもアップして無条件の慈しみや完全な安らぎ(ホ

ーム) や完全な喜びや命の意味や完全な美 (色と音楽) 等を感じるようになるからである。これらをすべてまとめてリアリティがアップし、地上の生よりももっとリアルであると言われている。(91)

夢は脳が外部からの入力なしに記憶をもとに作り出されるもので、目覚めている昼間よりもリアリティとクオリティが低く、影のような世界である。夢の中にはとてもリアルなものもあるので、ポジティブなリアリティがアップすることが試金石である。夢は恐れや不安といったネガティブな要素が主流である。夢は、陽画に対する陰画に例えることもできる。リアリティとクオリアのグレードは、エネルギーの振動数の高低によって決まる。真の存在は完全な慈しみ・安らぎ・喜び・命の意味・美等を備えている光のみであり (南無阿彌陀仏・永遠の命の光)、この物質界の生や闇は存在するものではない。この物質界は唯一の存在である光の全一意識の思念形態として生み出されたものであり、光のプログラムに他ならない。その意味で物質宇宙はマターでありヴァーチャルリアリティである。(世間皆虚仮、唯仏真実 - 聖徳太子) 光の欠如こそ物質界の根本問題であり、だからこそ物質界内では、この根本問題は解決することができない。物質界の生命や人間には、不可分の全一性と量子コヒーレンス・共存・非局在という仕方で、光の投影・写しが見られるが、我々は光の世界を生涯求め続ける。人間の体の70%は水分であり、水分が不足すると我々は飢きを覚える。飢きは水の存在の実証にはならないが、水が存在することも指し示している。我々が真の安らぎ (ホーム) と無条件の慈しみを飢望していることは、物質を超えた光の完全意識の存在の実証にはならないが、光の存在を指し示している。我々の自己のエッセンスの切望に対する答えは光の完全な意識にのみある。

「神よ、あなたは私をあなたに向けて造られたので、私はあなたを見出すまで真の安らぎを得ることはありません。」(アグネスチヌス)

この光は臨死体験や生きている内に天からの光に照らされる体験に見られるが、宗教のいう啓示と教説と同じではない。夢を見ている状態と日中目覚めている状態は同じ意識でも全く別の状態であり、同時に体験することはない。臨死体験や天からの光を照らされる体験も、通常の脳・肉体意識とは別の脳・肉体を超えた意識状態である。

典型的な例を引用しよう。

「私のスピリチュアルな体験は、肉体の生よりもはるかにリアルであった。」(92)

「臨死体験は、地上の生よりももっとリアルである。この地上の生は臨死体験と比べると夢のようなものに似ている。」(93)

「臨死体験は、この地上の生よりももっとリアルである。私はこの地上の生を夢のように感じる。臨死体験の時、その夢から目覚める。」(94)

「臨死体験のコア体験はリアルである。これに比べれば、地上の人生は夢のようなもの。地上の人生には価値がないということではなく、光の世界から地上の生の価値や意味が分かった。」(95)

この例では、この地上の生が夢のようでも生きる意味がないということではなく、光の世界から地上の生の本当の意味と価値が分かると言われている。

「この地上の生は夢や幻のようであり、臨死体験は真のリアリティである。」(96)

「それまでとそれ以後に体験したどのリアリティよりもリアルでした。それは真実という意味でリアリティでした。臨死体験と比べると、この地上での人生の方がずっと夢のようです。」(97)

「肉体が五感を持つなら、スピリットは50感覚を持つほど、この世のリアリティを超えている。この世界は奇妙にぼやけた夢に似ている。スピリットはリアルで、この世は込入った幻である。」(98)

「臨死体験は、地上の日常の人生よりももっとリアルである。」(99)

「臨死体験をした時、地上の生は本当のリアリティではなく、夢や幻のようなものであると分かった。本当のリアリティは物質界の転生の間にあるスピリットの生にある。」(100)

物質世界での生は夢・幻（マーヤー）であるという例を挙げよう。

「臨死体験の時、私はより高いレベルのエネルギーの中にいた。そこから見ると、地球はリアリティを持っておらず、夢・幻のようである。」(101)

「我々が地上で生きている存在は、本当にリアルなものではない。」(102)

「我々はゲームをするために地上にやってきた。ゲームは物質的リアリティの大いなる幻（マーヤー）である。死は存在しない。」(103)

ここでは、地上の生がゲームに例えられている。ゲームそのものは石のように客観的に存在しているものではない。ゲームが終われば、ゲームそのものも消滅する。しかしゲームをしている人にはリアリティそのものである。死ぬのは肉体のみであり、自己意識のコアはスピリットとして存続するのであれば、死も夢・幻（マーヤー）であることが分かる。

臨死体験の光こそ、リアリティそのものであるという代表的な事例を挙げよう。

「リアリティそのものは光であった。」(104)

「臨死体験は」究極のリアリティである。」(105)

光の存在は、無条件の慈しみ・完全な安らぎ（ホーム）・完全な喜び・完全な美（色と音楽）・完全な命の意味等を備えているので、完全なクオリアそのものであると言える。人間がこの物質界で感じるクオリアは、この光の完全なクオリアの不完全な仕方での投影・写しに過ぎない。真に実在するのは光だけであり、物質界にみられるのは、この光の不完全な仕方での投影・写しに過ぎない。影と闇はこの光の欠如を意味し、真に実在するものではない。影や闇は仮象・マーヤーに過ぎない。それは夢や幻となって我々に現象する。

⑩ この物質界の生は光の完全な全1意識の思念形態（夢）である。この物質の世界の生

が夢だとすれば、一体誰が見る夢なのか？それは宇宙意識（光の完全な全1意識）が見ている夢であり、思念形態である。それは物質界で生きている人間の思念形態が夢になるのとアナロジーになっている。この見方は、特に N.Danison によって主張されている。(106) また、著名な精神医学者木村敏は、高次元の現実が見ている夢が私達の人生である可能性を示唆している。(107)

代表的な例を挙げよう。

「私は夢を見ていると同時にある大いなる存在の夢の部分である。」(108)

「すべては永遠、純粹意識である。我々はメンタルな夢の中にいる。それは意識のダイナミックとして永久に構成されている。意識のダイナミックは自分を知っていて、我々の一人一人を通して自分を再創造している。我々は emptiness の点であり、そこでは宇宙の void あるいは nothingness が自分に気づく。私が見た万物は Universal Mind の思念形態から起源し、それがイメージと出来事という形で表出され、体験としてはっきりした意識と相互作用する。この体験全体は、体験のすべてのレベルでリアルなものの無限の一部であり、それを我々は断片的に分割し、我々の一時的なマインドはその限界にもかかわらず、それを読み解くことができる。神は全ての中にあり万物はその中にある記すことができない命の沈黙である。それは慈しみの意識の永遠である。粘土の一片から多くの形が作られるように、すべてのメンタルなデザインは nothingness の一時的な形という仕方で結晶化する。」(109)

この例では、我々は空・無が自らに気づく点であり、万物は宇宙心の思念形態で、それが意識と相互作用して体験となる。体験全体はリアルなものの一部であり、我々はそれを分割して読み解くと言われている。そして、すべてのメンタルなデザインは空・無の一時的な形という仕方で結晶すると述べられている。言い換えれば、我々は空・無の点であり、宇宙心の思念形態である。万物と相互作用して体験となり、メンタルなデザインは空・無の一時的な形という仕方で具体化されると言われている。また体験全体は無限の意識の一部であり、我々は体験を通して無限にリアルなものを読み解くことができると言われている。ここでは宇宙意識の思念形態と本来空・無である人間の意識との相互作用によって体験になり、体験全体から我々は宇宙意識を読み解くことができると言われている。

⑩ まとめ

- 1) 以上の臨死体験の考察が正しいとすると、真の实在（本体）は光の完全な全体意識にあり、この物質世界とその生は、その投影・写し・思念形態・ホログラム・アナロジー以外の何ものでもないことが分かる。この物質世界とその生は完全な全体意識の光によってつくられるホログラム宇宙に他ならない。このような見方はプラトンによって唱えられている。プラトンの考えによれば、真の实在はアイデア（形相）にあり、この物質界はその影に過ぎず、その存在の根拠をアイデアに負っている。(110) もっとも

プラトンの場合には幾何学（形相）にポイントがあるが、臨死体験の場合には 完全な意識・自己・知覚・理解と完全な慈しみ・安らぎ（ホーム）・喜び・美（色と音楽）・命の意味等にポイントがある。プラトンは幾何学（形相）を重視しすぎたと言えよう。臨死体験によれば、主体的な意識体験とそのクオリアの方にポイントがある。我々の現住所は、この物質の世界であるが、我々の真のホームは光の世界にある。

2) この世の物質界の生の夢・マーヤー・思念形態・ヴァーチャル性・ホログラムから、光の完全な真の実在（リアリティ・クオリア）に目覚めるということは、個として存在のあり方、（状態）が変化することで、空間上別の場所にあるパラダイスに移動することではない。世界全体は多次元の振動するエネルギーの全体場であり、オーケストラの音楽のように全体として完全に調和している。この全体場はホーラルキーになっていて、意識が集中する焦点がその人の個としての分節上の点となる。振動数をアップし、またダウンすることで多次元振動するエネルギーの全体場のホーラルキーを上昇したり、下降したりするものと考えられる。

代表的な例を挙げよう。

「夢から目覚めた感じで、どこかに行ったような感じではない。覚醒して 360 度の視野と完全な共感覚（複数の感覚が同時に認識される）。すべてのものが見え、聞こえ、感じられ、分かった。自分の過去・現在・未来を同時に生きていた。私に関わる出来事は、壁や空間を超えて全て分かった。盲人が初めて見えるようになった感じ。その人がどこか別の場所に行ったのではない。世界がどうなっているのかが見えるようになる。」(111)

この例では、自己意識のコアの状態の変化によって時間と空間のバリアがなくなってしまったと述べている。

「天国は特定の場所ではなく、存在の在り方なのだ。私達の本当の家も場所ではなく、一つのあり方に過ぎない。今この瞬間、私が我が家にいると感じている。他の場所に行きたいという気持ちはない。ここにしようがあちらに行こうが全く違いはない。すべては私達のより大きく拡大した、無限で素晴らしい自分の異なる側面に過ぎない。私達の本当の家は、一人一人の内側にあり、それは私達が行く所どこでもついてくる。」(112)

この物質界の生は夢であるということ、何の価値もないということではない。臨死体験では無条件の慈しみでもって光の世界を原点として地上の生を生きることが何よりも大切だと言われている。光の世界から地上の生の本当の意味と価値が分かるのである。

3) 光の世界のみが真の実在であり、この物質界は光の世界から見ると、夢・マーヤーやヴァーチャルリアリティに他ならないのであれば、どんな地獄のような惨事が起ころうと、またどれほど絶望的な状態に陥ろうとも、光の世界から見れば夢・マーヤーやヴァーチャルリアリティに過ぎず、光の世界の真の自己を損なうことは何一つ生じる

ことはないので、あまりに真剣に受け取る必要はない。

悪夢のような映画を見て恐怖に襲われたとしても、映画館の外に出れば本当に起こったことではないヴァーチャルリアリティだと分かる。死ですら肉体に起こることであり、真の自己はスピリットとして誕生するから、死ですら夢とマヤーに他ならない。愛する子供を失った母親は嘆き悲しむが、死者は光の世界で生きていて、光の世界で再会し互いに喜び合うことができるのである。

2例だけを引用しよう。

「驚くほど美しい光。とても明るく、虹よりももっと多くの色を伴う驚くほど美しい光と出会い、今まで味わったことのないほどの完全な喜びと崇高さと幸せを感じた。愛に満ちた優しさに圧倒された。信じられないほどの安らぎを感じ、本当は何も問題にならないのだと分かった。」(113)

「そこでは自分が誕生しつつあるように感じられた。生まれ変わるのでも、生き返るのでもなく、ただ生まれ出ているという感覚だった。」(114)

この物質の世界の根本問題は、この物質界の中では解決することはできない。(アインシュタイン、ユング) それは物質界を超えた世界でのみ真に解決できるのである。

⑪光の無条件の慈愛や真の安らぎ（ホーム）や完全な喜びや命の意味等は、肉体の五感によってキャッチされるものではなく、私のエッセンスによって感じられるものである。

純粹アウエアネスでは、感情（主体的な体験のクオリア）は脳・肉体よりもアップする。感情がピークに達すると、無条件の慈しみと完全な安らぎ（ホーム）と完全な喜びや完全な幸福感（至福）等になる。

典型的な例を見てみよう。

「感情は人間としては不可能なほど高まる。光からの慈愛が私を通して放射する。限らない慈愛・喜び・祝福が私を満たす。感情は光に反射して10倍強くなって私に戻ってきた。幸福感に満たされた。」(115)

「私は最高のポジティブな感情のみを味わった。」(116)

「光を見なかったが、存在の強度はとても明るいと感じた。圧倒的な感情で満たされた。」(117)

「個人の白光は、すべての人にある。我々は皆、自分の光を持っている。光は肉体の形ではなく、フィーリングの形で取り囲んでいる。白光は暖かさと充足感のフィーリングである。」(118)

臨死体験者の主体的な体験として自己のエッセンス（I am）は、地獄のような闇と影の状態から、パラダイスのような光の状態にシフトするが多い。ここにはクオリアのアップが典型的な仕方で見られる。水平軸（量）ではなく、垂直軸（質）の問題である。自己のエッセンス（I am）の存在のあり方（状態）がシフトするのであって、

空間上場所の問題ではない。意識の振動数が低い状態から高い状態にアップするものと思われる。

⑫私のエッセンス（純粹アウエアネス）・真の自己（ I am）の真の本源・ホーム・帰属・アイデンティティは、光の完全な全体意識にある。すなわち光の無条件の慈愛・完全な安らぎ（ホーム）・完全な喜び・完全な命の意味・完全な知覚・完全な美（色と音楽）等にある。我々は、この物質界の時空内に真の安らぎとホームを見出すことはできない。脳・肉体を超えた純粹アウエアネス（私のエッセンス）は、体外離脱直後はこの地上にとどまるが、その後、暗いトンネルを通過し広大な宇宙空間を飛行するが、そこにも私のエッセンスは真のホームを見出すことはできない。私のエッセンスは、光の世界の無条件の慈愛と完全な安らぎと完全な喜び等に出会って初めて自分の真のホームを見出すことができる。

代表的な例を挙げよう。

「慈愛の最も純粋な形を、万人は心の中心に持ち、これが宇宙の中心への橋である。」

(119)

「私の真のエッセンスは、慈愛のエネルギーである。」 (120)

「魂は、慈愛のためにつくられている。」 (121)

「我々の根本的本性は、慈愛と許しである。」 (122)

「光の存在は我々自身なので、我々は自身として慈愛である。天と地に魂が遍在していて、無条件の慈愛に値する。」 (123)

「私は私のエッセンスである私のコアそのものを見ることができた。そこにあるのは慈愛以外にはなかった。私のコアは完全な慈愛だった。全てを受け入れた。私自身の優しさ、罪の無い無垢を見た。私は唯完全に愛するのみであった。万人のコアは慈愛である。」

(124)

「慈愛と我々の魂は一つである。慈愛の光は各個人の内部にある。この慈愛は至る場所に遍在している。同時に私の一番内部のエッセンスにもある。」 (125)

「リアリティは慈愛にある。慈愛は大きさと実体を持ち、単に動詞のみではなく各詞である。慈愛と我々の魂は一つである。」 (126)

「我々の魂は最高のエネルギーである慈愛によって結ばれた永遠の存在である。」 (127)

「魂は私自身だった。魂は白光の全体性の内に完全に包まれた。肉体はその光の慈愛に気づかない。」 (128)

「真の I am はスピリチュアルな存在で、慈愛とアウエアネスで満たされている。」 (129)

⑬自己意識のエッセンス（真の私）は、光の完全な全1アウエアネスに由来する。従って物質界で生きている間中、自分の真の本源（ホーム）である光の完全な全1アウエアネスと一つになる事を飢望している。物質界で生きている間、自己意識のエッセンスには光の無条件の慈愛・完全な安らぎ（ホーム）・完全な喜び・完全な生きる意味等が

脳と肉体に制約されていて、殆ど欠如していて、せいぜい不完全な仕方では投影・写し・ホログラム・思念形態が見られるのみである。人体の70%は水からできているので、水が不足すると飢きを覚える。自己意識のエッセンスは、物質界でない霊の光の全1意識が真のホーム（本源）である。物質界で肉体によって制約されると、自己意識のエッセンスは自分の真の本源（ホーム）を飢望し、本源に還って一体になろうと切望する。飢きは水の存在を実証していないが、水の存在を指し示している。（間接的証拠）自己意識のエッセンスの飢きも光の存在を実証していないが、光の存在を指し示している。自己意識のエッセンス（真の私）の本来の帰属とアイデンティティは、光の全1意識にある。「神よ、あなたは私をあなたに向けてつくられたので、私はあなたを見出すことができるまで真の安らぎを得ることはありません。」(130)

この飢望がP.ラリッヒのいう究極的関心事であり、F.シライエルマッハーのいう絶対的依存感情である。飢望そのものは、光を指し示しているものの、光そのものではない。光そのものは臨死体験や光照体験（地上で生きている間に、天の内なる光に照明される体験）で啓示される。（人間の風俗や慣習と聖典に書かれているすべてを啓示とする所に宗教の誤りがある）。自己意識のエッセンスの渴望も、物質界を超えた聖霊の光の無条件の慈愛や完全な安らぎ（ホーム）や完全な喜び等も、物質や実体ではなく時空を超えた真の私の状態であり、主体的体験のクオリアである。 この自己意識のエッセンスの飢望は、物質界を超えたものであり、物質界のものへの肉体のエゴの飢望とは異なる。

⑭ 肉体時のエゴと光の全1意識としての真の完全自己は、私という存在のあり方

（状態）の問題である。それは自己意識のエッセンスが脳と肉体内にある状態から脳と肉体を超えた状態にシフトするということである。また、私という意識が日中目覚めている状態にあるのか、夢を見ている状態にあるのかという問題である。私のエッセンスは時空と空間を超えているので、場所（空間）と時間の問題ではない。同じことはパラダイスについても言える。

典型的な例を見てみよう。

「光の世界で、私の真の自己、私の真の状態での私自身を見た。」(131)

「真の安らぎ（ホーム）は肉体的感情ではなく、存在の状態である。」(132)

「天国とは特定の場所ではなく、存在のあり方なのだ」と理解し、私達の本当の家も場所ではなく一つのあり方に過ぎないと感じています。今この瞬間、私は我が家にいると感じています。私達の本当の家は、一人一人の内側にあり、それは私達が行くところ、どこにでもついてくるのです。」(133)

註

1) E.シュレーディンガー、精神と物質、工作舎、1987,118~127; S.マリン、隠れたが

る自然、白揚社、2001,9章

- 2) P.M.K.アトウォーター、光の彼方へ、ソニーマガジン、1995,113
- 3) K.Ring,Lessons From The Light,Insight Books,1998,298
- 4) www.nderf.org/tawnie-m's-nde.htm
- 5) A.S.Gibson,Glimpses of Eternity,Horizon Publishers,1992,74
- 6) www.nderf.org/tisha-g's-ndelike-adc.htm
- 7) www.nderf.org/kathy-w-nde.htm
- 8) www.nderf.org/r.t.f's-nde.htm
- 9) N.Clark,Hear His Voice,PublishAmerica,2005,63.これは死なしの体外離脱の例である。
- 10) www.oberf.org/patti-v's-obe.htm
- 11) www.nderf.org/charlie-d-nde.htm
- 12) www.nderf.org/crystal-m-nde.htm
- 13) S.Rogers,Lessons From The Light,Warner Books,1995,46
- 14) www.nderf.org/Jack-c's-probable-nde.htm
- 15) www.nderef.org/james-w.-nde.htm
- 16) www.dharma-talks.com
- 17) Dying to be me,Hay House,2012,69~70
- 18) B.VandenBush,If Morning Never Comes,The Old Hundred and One Press,2003,104~105
- 19) www.nderf.org/Lisa's-nde.htm
- 20) www.nderf.org/when time stood still-nde.htm
- 21) www.nderf.org/Anthony-N-nde.htm
- 22) W.J.Serdahely,Near-Death Experiences and Dissociation:Two Cases,JNDS 12,1993,87~88
- 23) www.nderf.org/Shannon-C-nde.htm
- 24) www.nderf.org/julie-n's-nde.htm
- 25) Y.Perry,More Than Meets the Eye,2004,45
- 26) 「完全情報・完全意識・完全知覚・完全理解・完全コミュニケーション」「脳・肉体意識から超脳・肉体意識へのシフト」の項を見よ。
- 27) www.nderf.org/mak-b--probable-nde.htm
- 28) www.nderf.org/steve-b's-nde.htm
- 29) 「完全情報・完全意識・完全知覚・完全理解・完全コミュニケーション」を参照。
- 30) www.iands.org/nde-archives/ndeaccounts/gargantuan energy souce.html
- 31) www.nderf.org/stella's-nde.htm
- 32) A.Moorjani,Dying To Be Me,Hay House,2012,66

- 33) www.nderf.org/r.t.f's-nde.htm
- 34) www.nderf.org/r.t.f's-nde.htm
- 35) www.nderf.org/kathy-w-probable-nde.htm
- 36) www.nderf.org/funny-p-probable-nde.htm
- 37) www.near-death.com
- 38) www.nderf.org/jacque-m-nde.htm
- 39) R.Kruger,A Higher Good, PublishAmerica,2005,24
- 40) www.nderf.org/ali-k-nde.htm
- 41) R.Kruger,Good,29
- 42) C.Blood,Science,Sense & Soul,Renaissance Books,2001,36
- 43) www.nderf.org/roger-m's-nde.htm
- 44) www.nderf.org/kristin-d's-nde.htm
- 45) www.nderf.org/roger-m's-nde.htm
- 46) www.nderf.org/sue-v's-nde-like-ste.htm
- 47) www.nderf.org/julie-n's-nde.htm
- 48) www.ndder.org/bonnie-b-nde.htm
- 49) www.nderf.org/mathilde-m's-nde.htm
- 50) www.nderf.org/mark-j's-nde.htm
- 51) J.Olsen,I Knew Their Hearts,pPlain Sight Publishing,2012,31
- 52) www.nderf.org/judie-n's-nde.htm
- 53) Y.Perry,More,55
- 54) 記憶が私と言う統合性を保持しているのではない。記憶喪失者も自己の統合性は維持している。
- 55) www.nderf.org/mathilde-m's-nde.htm
- 56) www.nderf.org/NDERE/NDE Experiences/robyn-nde.htm
- 57) www.near-death.com/Jayne Smith.html
- 58) www.origenes.de/nde/katzman/katzman.htm
- 59) B.VandenBush,Morning,105
- 60) www.iands.org/ndeaccounts/still me.html
- 61) www.nderf.org/esteban-fr's-nde.htm
- 62) A.Moorjani,Dying,76
- 63) www.oberf.org/Christopha's Experience-obe.htm
- 64) N.ドハティ、臨死・天国からの電話、voice,2003,50
- 65) www.nderf.org/alejandra-m-nde.htm
- 66) N.Danison,Backwords Guidebook,A.P.Lee & Co.,2009,38~41
- 67) www.nderf.org/kim-g's-nde.htm

- 68) A.Petro,Remembering the Light,Outskirts Press,2011,75
- 69) 飯田史彦、ツインソウル、PHP 研究所、2007,78~83.92~93
- 70) D.Bennett,Voyage of Purpose,Findhorn,2011,20
- 71) www.nderf.org/whenn-time-stand-still.htm
- 72) www.nderf.org/nancy-c's-nde.htm
- 73) A.フェニモア、臨死体験で見た地獄の情景、同朋舎出版、1995,184
- 74) W.J.Serdahely,Near-Death Experiences,87~88
- 75) N.Danison,Backwards,APLee & Co.,2007,229~230
- 76) Mellen-Thomas Benedict,inL.W.Bailey & J.Yates,The Near-Death experience,Routledge,1995,42~43
- 77) www.nderf.org/jesse-n's-nde.htm
- 78) www.nderf.org/mark-h-possible-nde.htm
- 79) A.ムアジャーニ、喜びから人生を生きる！、ナチュラルスピリット、105
- 80) A.Moorjani,Dying,65
- 81) www.nderf.org/anita-m's-nde.htm
- 82) www.nderf.org/when-time-stood-still.htm
- 83) www.nderf.org/beverly-b's-nde-like.htm
- 84) www.nderf.org/roger-c's-nde.htm
- 85) スワーム・ヴィラージュシュワラ、真実への道、出帆新社、2007,324~325
- 86) 同書、320~321
- 87) 同書、320~323
- 88) www.nderf.org/ludmida-nde.htm
- 89) www.nderf.org/roberet-c-nde.htm
- 90) Spirituality Is A Science,Cornwall Books,1999,110
- 91) 客観的リアリティに対して、主体的リアリティをドイツ語では Wirklichkeit という。
- 92) www.well.com/user/bobby/NDE/estes-nde.html
- 93) www.nderf.org/Lisa's-nde.htm
- 94) www.nderf.org/hafur's-nde.htm
- 95) E.Alexander,Proof of Heaven,Piatkus,2012,10~11
- 96) www.near-death-experience-and-afterlife.com/experiences/judaism02.html
- 97) www.nderf.org/Lisa's-nde.htm
- 98) www.nderf.org/NDERF/NDE_Experiences/jeffery-nde.htm
- 99) www.nderf.org/michael-o-nde.htm
- 100) www.nderf.org/martine's-probable-nde.htm
- 101) www.nderf.org/judith-p-nde.htm

- 102) www.nderf.org/robert-l-nde.htm
- 103) www.nderf.org/NDERF/NDE_Experiences/robyn-nde.htm
- 104) www.nderf.org/james-w-nde.htm
- 105) www.nderf.org/michael-o-nde.htm
- 106) Backwards,47~48
- 107) 時間と自己、中央公論者、1989,191~193
- 108) www.nderf.org/james-w-nde.htm
- 109) www.nderf.org/hafur-nde.htm
- 110) B.Haisch,The Purpose Guided Universe,New Page Books,2010,124
- 111) A.ムアジャーニ、喜びから、265~266
- 112) 同書、250
- 113) J.アマトウーズ、「死ぬこと」の意味、サンマーク出版、2001,73~75
- 114) E. アレグサンダー、プルーフ・オヴ・ヘヴン、早川書房、2013,56
- 115) N.Danison,Backwards,231~232
- 116) www.nderf.org/denise-b's-nde.htm
- 117) www.nderf.org/deborah-k.nde.htm
- 118) www.nderf.org/kim-g's-nde-htm
- 119) www.nderf.org/frank-a's-nde.htm
- 120) www.nderf.org/teri-r-nde.htm
- 121) www.nderf.org/esteban-fr's-nde.htm
- 122) www.nderf.org/beverly-b-nde-like2945.htm
- 123) R.Kruger,Good,25~26
- 124) www.near-death.com/Jayne_Smith.html
- 125) A.F.Ellis, Revelations of Profound Love,Trail osf Hope
Publishing,2012,113
- 126) 同書、59
- 127) www.nderf.org/lynn-m's-nde.htm
- 128) www.well.com/bobby/NDE/estes-nde.html
- 129) www.nderf.org/filiesha-l-probable-nde.htm
- 130) アウグスチヌス、告白録
- 131) A.F.Ellis,Love,63
- 132) www.nderf.org/patricia-c-nde.htm
- 133) A.ムアジャーニ、喜びから、250

